

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴル国のフォーク (箸の文化：
ごちそうを口へはこぶ道具：世界一周「食具」の旅)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5641

III

世界一周「食具」の旅

モンゴル国のフォーク 内モンゴルの箸

小長谷 有紀

(こながや ゆき)

一般に、どの地域においても、歴史とともに食卓は変化する。モンゴル高原の場合、近代化の過程で、北部はロシア文化の影響を強くうけてヨーロッパ流に変化し、南部は中国文明のもとで強く中国流でとどまった。同じ民族の食卓はそうして別々の道を歩むこととなったのである。この興味



モンゴル国にみる食卓

深い変化を、食事の道具すなわち食具から読み取ってみよう。

ウランバートルは、現在、人口百万人を超えるモンゴル国の首都である。清朝において一九一一年に辛亥革命がおこり、それを契機として中国からの離脱がはかられた結果、一九二四年にモンゴル人民共和国が

成立した。ソビエト連邦成立後、世界で二番目の社会主義国が誕生したのである。そして、政治的にソ連の指導をおおぎつつ、また経済的にソ連の援助を受けつつ、モンゴル人民共和国は、社会主義のもとで近代化を果たした。人口の大半が中国人などの外国人であった町は、高等教育機関が設立されるに及んで、全国から俊英たちが集るところとなり、彼らがやがて工場労働者や知識人、官僚などとして町に住まうようになり、そして、モンゴル人たちの首都へと生まれ変わった。

田舎から出てきた少女少女たちは、町に出てきて初めて、土のような味にするジャガイモや、口のなかで崩れてしまうトマトなど、「気持ちの悪い」食べものと出会った。ビールは「馬のしっこ」と呼ばれていた。おいしい肉と乾燥した硬いチーズをもっぱら食べてきた彼らにとつて、信じられない食事だったらしく、このような食べものとの劇的な記憶はよく語られる。そうした思ひ出があまりにも強いからだろうか、スプーンやフォークと出会ったときのことを語る老人と未だ出会ったことがない。おそらく、こちらから聞いてみれば、その歴史的



腰につるした豪華な食具

な出会いについて楽しい思い出を話してくださるにちがいない。

モンゴル製のスプーンやフォークが普及するのは、やはりモンゴル製のジャガイモが出回る頃、すなわち一九五〇年代以降の「大開拓の時代」であろう、と思われる。二〇世紀の後半、大規模な農耕が本格的に開始されると同時に、家畜から得られる畜産物を首都で加工したり、鉱物資源の輸出が本格化したり、多様な工業化が進展したからである。

社会主義時代はまたソ連へ留学することによって、幹部や知識人の養成が計られていた。したがって、高等教育についてソ連で肩代わりしてもらっているあいだにも、食具の西洋化がモンゴル人の生活習慣とし

て浸透したと見てよいだろう。ソ連を中心とする社会主義圏からの技術指導者は、産業のあらゆる部門、政治のあらゆる局部に常時駐在していたので、彼らとの接触も大いに西洋化を促したと推測される。

このようにして、留学先で、あるいは首都で、人びとが学び、そして彼らが国家の建設に尽くすべく地方都市へと移動するにつれて、急速に食具の西洋化が全国的に浸透した。こうしてスプーンとフォークが普及したと言つてよいであろう。

一九八九年に民主化運動の波を強く受けて、一九九二年、モンゴル人民共和国はモンゴル国へと名称を変え、新生した。以来、市場経済への移行を果たした現在、モンゴル国の食卓は西洋化というよりも国際化している。

これに対して、モンゴル国と国境を接する中国内蒙古自治区では、箸文化圏のなかにとどまることとなった。言い換えれば、国境は北からの食具の西洋化を阻止したのであった。大都市でも、地方の町や村でも、そして草原部においても、木製の箸がいきわたっている。

モンゴル国および内蒙古自治区のいずれの地域でも、博物館に行くと、モンゴル遊牧民の伝統的な道具が展示されている（左上写真）。食具としては、腰につるしたり、長靴にさしたりして保持する、ナイフと箸のセットが必ず見出されるであろう。

上等な箸は、象牙を使い、銀細工がほどこされている。一般的には、象牙に代えてラクダの骨製が用いられていた。しかし、その普及率は実際には低かったと思われる。なぜなら、小麦粉によるうどんがさほど普及していなかったからである。肉の塊をナイフで食べるか、お茶に浮かした黍^{キビ}を飲み、最後は舌で椀をきれいなため食べるか、乳製品を噛^かんで食べるか、なので、箸はさほど必需品ではなかったろう。

庶民のあこがれであったろう食具は、文化大革命などの業火^{ごうか}をくぐりぬけて、博物館で永久の眠りにについている。

（写真はいずれも筆者撮影）

プロフィール

小長谷 有紀（こながや ゆき）

一九五七年生まれ 大阪府出身

国立民族学博物館教授

専門分野・民族学

著書・「モンゴル草原の生活世界」、「モンゴルの二十世紀—社会主義を生きた人々の証言—」、「世界の食文化・モンゴル」